

つい最近、これまで度々ビバハウスにも来て頂いた埼玉大学の安藤先生より衝撃的なお便りを頂きました。先生のゼミの学生さんで、ビバハウスをテーマに大学院の修士論文をこの春ついに完成されて、わざわざその事をビバハウスに報告にも来てくれた岩崎靖幸さんが以下の文中にある様な理由で亡くなられたとの事なのです。以下は、岩崎さんを偲んでの『追悼文集』のために、書いたものです。

「今回は余りにも突然の事で、今になってもまだ信じられない。本当は信じたくないというのが実感です。障害者を無差別に殺したり、平気で虐待するなどのニュースばかりが伝えられる中で、児童福祉施設職員の岩崎靖幸さん(28歳)が相模原市の道志川で溺れかけた入所者の高校生を救おうとして自分が溺死してしまったとの事実を知らされて、余りにも悲惨な出来事にショックを受けました。何としても彼の志を後に残る私達一人ひとりがどうやって受け継いでいくべきかが問われているのだと思います。

埼玉大学環境教育学部の安藤聡彦先生のゼミナールでは、共通のテーマとして、『痛みに向き合う』の課題で、「水俣病」などにも取り組んで来られましたが、それ以降に不登校問題に取り組まれ、それがご縁で北星余市高校およびビバハウスもたびたびご訪問下さいました。そのゼミの一員として岩崎さんがビバハウスに最初に来た時の印象が一番強烈です。彼のそれまでの人生で受けてきた様々の苦しみを涙ながらに語る彼の姿を目の当たりにして、こんなにも真剣に自分の人生を生きている若者がまだいるのかと驚きました。ゼミのみなさんは、単に私達の話聞くばかりではなく、実際にビバハウスの若者たちのしている体験を共にしたいとの事で、当時私たちが一番力を入れていたグループワーク、余市のお隣の仁木町の「サンユウ農産」さんの有機栽培での紫蘇畑での雑草取りにも参加してくれました。それがきっかけでそれ以後も毎年ゼミの方々に来てくださるようになりました。

しばらくの間は、安藤先生の環境教育学部だけの学生さんだけでしたが、だんだんと枠が広がり他の学部の学生さんも来られるようになりました。安藤先生がご都合で来られないときも岩崎さんが引率代行者になって来てくれました。不思議に思っ私たちが岩崎さんに、参加者が増えている理由をお聞きすると、「他の学部の学生にとっても、この夏休みの『草むしり隊ツアー』は大人気なのです。」と本当にうれしそうに語ってくれた彼の笑顔はいまだに忘れる事ができません。

今ビバハウスの食堂には、ビバの若者達の『初志貫徹』、『元気』、『本気』、『進級』などの今年の手紙と合わせ、『再発』という岩崎さんの手紙も飾られています。これは彼がビバハウスをテーマとした修士論文の完成の報告に今年春来てくれていた時お願いして書いてもらったものです。大学院修士課程の卒業を機に、さらに研鑽を積んで、ほぼ3年ほどをメドにいずれはビバハウスのスタッフになれるような自分になりたいとの決意だとひそかに明かしてくれた尊い手紙です。その日が来てくれる事を、私達はこの北海道、余市の地でこれからもずっと待つ決意です。」

